アガペ・ワールド ニュースレター 2021年夏号

アガペ・ワールドは英国で正式登録された慈善団体です。太平洋戦争で日本軍に捕らえられた軍人元捕虜や民間抑留者などの犠牲者とその家族の傷付いた心と身体の癒しと和解を目指しています。

日英二か国語で刷新したウェブサイト: https://www.agapeworldreconciliation.org/



日本代表: 小菅啓子

メールアドレス: victory8068@gmail.com

電話番号: 090-1266-3390

日本事務局:藤田宏二郎・美代子

メールアドレス: agapeworldiapan@vahoo.co.ip

創設者&ディレクター: 恵子・ホームズOBE 35 Leyburn Gardens CR0 5NL UK

メールアドレス: <u>agape.kingdom@gmail.com</u>

日本語ニュースレター夏号は、英文ニュースレターの翻訳に日本向けニュース を加えた構成になっています。編集・校正は英アガペの上野浩子



極東元捕虜のフランク伯父さんの想い出

「ポールさんがアガペ・ワールドに関わるようになったきっかけは何ですか?」。日本でもイギリスでもよく聞かれる質問です。多くの方々と同じで極東元捕虜(FEPOW)だった母の一番上の兄が理由です。その伯父、フランク・パーディの思い出を語りましょう。

フランク伯父は、第二次世界大戦、英国空軍 (RAF)に所属していました。旧英連邦支配下 だったシンガポールが日本軍の侵攻で陥落する と、捕虜となり、あの悪名高きチャンギ捕虜収容 所に収監されたのです。

安否確認ができず、子供だった母を含めイギリスの家族はみな、首を長くして朗報を待ったと母はよく口にしていました。「骨皮筋衛門」になって帰還した時の衝撃についてもです。やつれきった伯父の写真が捕虜生活の凄まじさを今も無言で物

byポール・ダキン会長

語っています。健康を取り戻すのには何ヶ月もかかりましたが、フランク伯父はやがて結婚して教師になりました。

優しい人でしたが、伯父のどこかしら落ち着きの

ない様子は、幼かった私の脳裏に焼き付いています。食事中にテーブルを指でコツコツ叩いたり、貧乏ゆすりをしたり、一カ所に長く留まっていることができませんでした。絶えずそわそわして、不安定な印象でした。

フランク伯父が自らの捕虜体験を口にすることは殆どありませんでした。もちろん、FEPOWの年次総会など元捕



この夏休み。左後ろがポールさん、お孫さんのアヴァちゃん(5歳)とジーン夫人と一緒に。

虜の仲間同士では違ったかもしれません。忌み嫌うべき蛮行を目の当たりにし、伯父自身も蛮行を耐え忍んだのよと、母は教えてくれました。



チャンギ捕虜収容所は元々、刑務所だったものを旧日本帝国軍が収容所として使用した。写真は「チャンギ・プリズン・サバイバー」アーカイブより。くり抜き写真がRAF時代のフランク・パーディ伯父。

私が鮮明に覚えているのは、車などの日本製品を買うイギリス人がいることに、伯父がひどく驚き、怒っていたことです

通りを歩いていて、 東洋的な外見の人が 近づいてくると恐れ 慄いて、横丁に身を 隠してしまったとの 逸話もあります。

クリスチャンだった伯父は、収容所内での日曜礼 拝でオルガンを弾いたりもしたようです。しか し、戦争の傷跡や苦い体験を忘れたり、赦したり することは簡単ではなかったのです。

「フランク、君に会わせたい人達がいるんだ」。 戦後数十年が経ったある年の教職者大会のこと。 セミナーの合間にある休憩時間に、こう声をかけ てきた友人を振り返ったフランク伯父は、度肝を 抜かれました。そこには、イギリスに研修に来て いた日本人教師6人が立っているではありません か!

「完全に立ちすくんでしまった。動くことも、話すこともできなかったんだよ」。数ヵ月間が経っとき、こう打ち明けてくれました。まさに恐怖と不安がよみがえった瞬間だった、と。

この日本人教師らは2週間後から北部の都市ヨークを訪問する予定で、地元に住む伯父に、その水 先案内を頼みたい、との事でした。友人は伯父の 捕虜体験を詳しくは知らなかったのです。一言も 声を発することができないまま、フランク伯父は ただ呆然として、日本人6人が立ち去るのを待った そうです。

自分の住む街を日本人に案内するなんぞ、一体全体できるだろうか!?まんじりともせず、悶々としたまま朝を迎えた。断ろう。そう心に決めて電話をかけようとしたが、そのたびに何かに阻まれた。あっという間の2週間。不安や恐れを解消する最後のチャンスかもしれない。やってみよう。こう意を決していたことに、自分でも驚いたーー。

当日。そこにはヨークの案内役を楽しんでいる自分がいた。あれだけ悩んだのに、当初の恐怖心は嘘のように消えていた。何かが心の中で弾けて、壊れた感覚を覚えたと、伯父は言っていました。

実際に以前よりもずっと落ち着いて穏やかになった伯父。家族もその変化をひしひしと感じていました。その年の秋、台所にいた叔母をフランク伯父は驚かせました。「シンガポールに行こう。年末の飛行機をもう予約したよ」。

自分が捕虜として過ごした場所を見て欲しい、チャンギを訪ねて欲しい。40年という時を隔てた今だからこそ、そこで何が行われたかを、聞いて、見て欲しい。フランク伯父が初めて心を開いたのです。これには伯母をはじめ、家族はみなビックリしました。フランク伯父がこの世を去る数年前のことです。長い間ひとりで抱えてきた恐ろしい戦争の記憶を、ようやく整理できたのでした。





左の写真はポールの長女(当時3歳)と一緒にカモに餌をやるフランク伯父。右は「アガペの旅ー心の癒しと和解の旅」にポールが随行した2005年、熊野にて

「『アガペー心の癒しと和解の旅』。日本を訪れる元極東捕虜ご一行様に同行する医師 募集」。こんな広告が目に留まった時、私はフランク伯父のことを即座に思い出しました。伯父を覚えて、敬意を表したい。私は迷わず、恵子に連絡を取りました。

渡航の機会は、2005年に与えられました。元捕虜 3人に加え、元捕虜の家族らが大勢、参加したア ガペの旅は強烈で感動的。これまでの人生のなか で最高の思い出の一つとなっています。参加者にはみな、特に元捕虜の3人には、大いなる敬意が表されました。私たちは行く先々で多大なおもてなしを受け、追悼と友好の記念式典に出席し、魅力的な観光を楽しみました。

アガペの旅の後も、恵子とは連絡を続け、アガペの活動への関与を深めてゆきました。ついには会長として招かれ、衝撃と名誉を感じながら、今日に至っています。

イギリスの対日終戦記念日、VJ デー

最初の2つの英文字VJは「ビクトリー・オーバー・ジャパン」の省略で、VJデーとは第二次世界大戦中に大日本帝国軍が無条件降伏し、太平洋戦全戦が終結したのを記念する日です。イギリスも日本と同様に8月15日を終戦記念日としていますが、アメリカでは降伏文書が調印された9月2日が記念日となっています。76周年を迎えた今年は、コロナ規制の影響で昨年と同様に小規模な記念式典が各地で行われるに留まりました。



左の写真は、左端がゆき・ジョンソン氏、英アガペからは恵子の代わりに出席した浩子(右端)とともに、娘の美夏(15歳)が浴衣姿で応援に駆けつけました。右の写真はアガペ活動の展示物を読む参加者のお子さん。

広島・長崎の原爆投下を覚えて「平和を祈る」特別企画

VJデーに先立つ8月6日から9日まで4日間は、ロンドン西部のセント・マーティンズ教会で広島・長崎の原爆投下を覚える特別祈祷会など各種の催しが行われました。英聖公会レイ・ミニスターのゆき・ジョンソン氏は「原爆犠牲者の追悼はずっとやりたかった」と、75年周年を迎えた昨年にやっと始めることができた追悼に対する心の内を明かしてくれました。特別企画の一環として、アガペを通した和解と癒しの展示もさせて頂きました。詳しくは追って、アガペ・ワールドのウェブサイトでお伝えします。

セント・マーティンズで行われた「平和を祈る」の特別日曜礼拝の様子は<u>こちら</u> (https://www.youtube.com/watch?v=JscQ7MZ66-s) からご視聴いただけます。

在英日本大使館主催の日英友好や平和の記念リユニオンは秋ごろー!?

極東元捕虜(FEPOW)やその家族などイギリスに住むアガペ・ワールド関係者にとって、在英日本大使館が主催する日英友好と和解の記念パーティ(通称: リユニオン)は、朋友と再会できる夏のイベントのひとつです。6月半ばの開催が恒例となってきましたが、今年もコロナ規制が続いていたため、通常の記念祝会はできず、残念でした。昨年は秋に「平和と和解のオンライントーク」が持たれましたが、今年はーー?日本大使館からの連絡が入り次第、お知らせします。

恵子に直撃インタビュー

暑中お見舞い申し上げます。秋の気配が増すイギリスより、2020年秋の日本ミッションでの恵子の活動報告を続けます。

(聞き手は上野浩子)

感動的だったと恵子が振り返るのは「日本いのちの木メシア ニック集会(TOI)」の礼拝。創 世のはじめに主が祝福し、聖であるとされた第7日目の安息日を守った礼拝で、10月の土曜日に小菅啓子とともに参加しました。

主任牧師は数十年の在米歴がある内山ポールご夫妻。ご子息の

アイザック牧師は、イスラエルの神学校で3年間学んだだけあり、ヘブライ語と英語、日本語の3カ 国語を自在に操ります。奥様はアメリカ系ユダヤ 人のメリッサさん。



左からアイザックさんとメリッサさん、恵子、ポール先生とサラ夫人

アガペの活動に興味を示してくださり、お宅に招いて下さいました。新宿から数駅向こうにあるご自宅を啓子と共に訪ねることができたのは、新宿プラザホテルで行われた第20回国家祈祷会の後のことでした。

アイザック牧師ご夫妻の家は、ゆったりとした キッチン・ダイニングのあるアメリカンスタイ ル。世界各国からの来日客をもてなすために改装 されたばかりで、2階全体が宿泊施設「ベイト・サ ムライ」になっています。大テーブルに並べられ たメリッサさんの手料理の数々に、ご夫妻とポー ル先生とサラ夫人の6人で舌鼓を打ちました。 訪問者のことをいつも事前に神様に祈り尋ねるというサラ夫人。神様のお言葉はただ一言、「ユニーク」だったとのこと。「ユニーク」なアガペ

の証しは、英語でもぜひ 出版するようにと勧めて 下さり、メリッサさんは 恵子の英文原稿の校閲を 申し出てくれました。

次回のアガペの旅の際には、2階の宿泊施設を提供して下さるとのこと。5万円の寄付まで頂き、心より感謝しております。

日本全国を駆け巡った 2020年秋の日本ミッショ

ン。啓子が運転する車のタイヤが高速道路を走行中に突然パンクしたときも守られ、救援者が素早く与えられるなど神様の力強い御手によるご配慮が満載。驚きと、喜び、感謝に満ちたものでした。合計3000ポンド(約45万円、日本アガペで管理)の献金まで与えられました。

写真は「モーセの律法(トーラ)」を抱える内山ポール主任牧師。

同集会では、使徒15書21節の記述通り、安息日ごとにトーラを宣べ 伝えている。ユダヤ人と異邦人が真にひとつの会衆として、天地を

創造された偉大な神であり、父・子・聖霊のひとつの主を、主の定 めた安息日に礼拝できるよう「第二のエルサレム公会議に向けて

(TJCII) 」の働きもなされている。

11月の最終日。深夜12時50分発の帰国便に備えて、夜10時までは啓子宅で過ごすつもりだったところに鳴った電話。ロンドンで同じ教会に通った後、十数年間も音信不通になっていた惠さんではありませんかーー!

絶妙のタイミングに驚きつつ、急きょ約束した羽田空港での出立前の食事。ここにも、また、神様のご高配が隠れてました。この逸話は、アガペのウェブサイトに新設したブログで取り上げてますので、そちらでお読みください。

規制や自粛でまるでゴーストタウンだった羽田空港。ドイツ経由便の乗客はたったの20人でした。営業中のレストランはなく、静まり返った空港ビルの一角に座した恵子ら3人。閑散としたビル内にも主を讃える歓談の声が響いたのでした。

* * *

主は、その恵みの倉、天を開き、時にかなって雨 をあなたの地に与え、あなたの全ての手のわざを 祝福される。(申命記28章12節)

ハレルヤ。神の聖所で、神をほめたたえよ。... 角 笛を吹き鳴らして、神をほめたたえよ。 (詩篇150章1,3節)